

もったいない! 未来のために
母の視点で **よりも** で見直し
次世代に借金、リスクを残さない

県議会議員

西村久子 県政報告

第38号

発行 西村久子

彦根市甲崎町

TEL・FAX 43-4700

Eメール hisako@country-farm.net

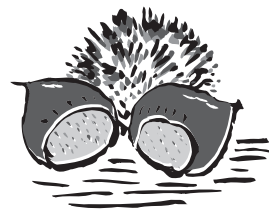


今日 **よりも** 明日

節電に明け暮れ、とりわけ暑さを感じた長い夏も、やっと名残を薄くし、秋の行事が次々と子供のはしゃぐ声に乗って、伝わってきます。遅い台風が政治不安に追い打ちをかけ、近隣国、特に日中間がぎくしゃくしています。

野田政権の続投と、自民党安倍総裁の誕生、そして日本維新の会の立ち上げ、どこが一番の脚光を浴びて国民の期待を集めているでしょうか。近い将来に・・・と言われる総理大臣の約束は、いつ果たされるのでしょうか。日本のために一刻も早く転換を図っていただきたい。10月20日、自民党安倍新総裁が来県し、国難からの日本再生を訴える予定です。

さて、中部圏知事会議に於いて嘉田知事は唐突に、「リニア新幹線が開通の後には、現在の東海道新幹線米原駅ー京都駅間に新駅が必要」との発言をされ、大きな話題となっています。もったいないに共鳴した県民世論に押された知事でありましたが、滋賀県益を考えるとご本人としては、新駅必要の確信あって、黙っていられたのでした。費した時間とお金は悔しいですけど・・・必要なものは必要なんです。今年度滋賀の交通ビジョンの取りまとめに向けて、素直に歓迎した意見の広がることを願っています。



平成24年9月定例会一般質問より(抜粋)

滋賀の女性健康寿命 全国最下位について(知事)

厚生労働省は本年6月1日、「健康寿命」なる新しい指標を算出して発表され、これにより“長寿大国日本”の現実が浮き彫りになりました。

健康寿命とは、「介護を受けたり病気で寝たきりにならず、自立して健康に生活できる」年齢のこと。発表された数字は、2010年は男性が70.42歳で、女性は73.62歳であります。

その全国ランキングの中で、滋賀県の女性の健康寿命は、何とワースト1…全国第47位の72.37才と記されておりました。最下位なのです。ちなみに滋賀県男性は、18位の70.67才とあります。

全国平均寿命と全国健康寿命の比較は、男性79.55歳、女性が86.3歳。つまり、男性は9年、女性は約14年近く、健康ではない状態で生きている、つまり生かされていることがわかります。

地域を支える医療福祉・在宅看取りを重点施策と位置付け取り組まれている滋賀県において、平均寿命は男性が全国第2位、女性が第13位とそれぞれに、長命をいただいております。

男性よりも数年長生きの女性において、健康寿命全国最下位の滋賀県女性の実態は、多くの課題を含み様々な分析が必要と思えます。この公表を受けてどのようにお感じになりましたか。

答 私もこの新聞記事を見て大変驚き、すぐに担当を呼び、その背景また対策を指示をしたところであります。

健康寿命の算出指標には、主観的なものと客観的なものがあり、今回の健康寿命は、主観的なものとして、「本人が健康を自覚しているか」また「活動に支障がないか」ということで測られたもので、しかも、サンプルもごく一部ということで、必ずしも全県の該当の人に対して、サンプリングの中から、主観的調査をしたものではないということです。

特に、「健康上の問題で日常生活に何か影響がある」との回答を集計したもので、これは、厚生労働省の研究班による調査結果です。その結果、本県の女性が全国最下位だったということです。

なお、同じ研究班による介護度で判断される客観的な健康寿命は、全国で11位となっております。

つまり、この差は何なのかという事も含め、指標の違いにより、大きく結果が異なるということも研究をする必要があると思っております。とはいえ健康は、本人自身が健康と自覚していることが大切であ

りまして、今回の調査結果は重く受け止めていきたいと考えております。

健康寿命が男女ともに70才少し…ということは、人が生きていくと胸を張り実感できる年齢は意外に短く、高齢者にとって深刻な問題であります。

県の重点施策に地域を支える医療福祉・在宅看取りプロジェクトにプラスして元気で長生きできるよう、意識して健康寿命を上げるべく、施策の充実を図っていただくことを提言し、知事の所見を求めます。

答 高齢になっても介護を受けることなく、健康に暮らせることは、全ての県民の願いであります。県民の健康づくり・介護予防に、より力を入れて取り組むことが、非常に重要であります。

今回公表された健康寿命において、本県の女性が最下位となった要因を分析してみますと、健康でないと認識している理由は、65歳以上では、日常生活の動作、あるいは、外出が制限されているということが、大きくきいております。そのため、適度な運動や休養、栄養、あるいは外出をめざすような形での社会参加等の健康的な生活習慣が、県民や地域に定着していくことが重要と考えています。

今回の結果と健康づくりに関連する様々な意識取り組みを検証し、必要な施策を講じてまいります。現在改定中の「滋賀県保健医療計画」においては、健康寿命の延伸を数値目標に掲げ、その達成方法を検討しながら、あわせて、すべての年代で健康的な生活を送れる滋賀づくりを目指していきたいと考えております。



再質問 この健康寿命はさほど気にしなくてもいいと思ってもいいのかもしれませんが、でも、介護寿命が11位となるとここにも問題はあると思えます。高齢になれば少しの手助けを受けながら日暮しのできる状態は当然であり、ほとんどの高齢者がたどる道であってほほえましくもあります。体のどこかが痛いとか、しんどいとかいうわけでもなければ、こうした状態であってもむしろ元気、介護支援センターに通いながらもせめて寝たきりにならず、また、少々の物覚えの悪さはあっても庭の草取りをしたり、お茶を飲んだりおしゃべりしたり周囲の人々と交わりあって暮らせていけたら、それは元気の内であると思えます。

俗に言われる余生を楽しむこと。しかし、今、余生と言える暮らし方をしている人より、独立した子供たちと離れて頼るところ

裏面に続く

なく現役で高齢を生きている人がほとんどの時代になっていると感じています。高齢者夫婦世帯はまだ助け合うことができますが、高齢女性の一人暮らしが、男性に比べて数段多いのも現実です。

家族の中で、高齢者を支えることが当然であるという暮らしを応援する施策が必要ではないでしょうか。最後は看取りに行きつくことではありますが、身近に手助けがあれば、その時まではまだまだ元気で暮らせる余生をより長く作り出すことができると思うのです。

しかし、家族で支える仕組みを外して、この部分を行政や社会で面倒を見る…となるとどれだけあっても追いつく話ではありません。看取りを重要課題とするのと同じく、年老いた親と同居して手助けをすることに評価に値する支援策を講じられることを提案しますが、いかがお考えですか。

答 家族が多世代で近住しながら、お互いに支え合う、そのことは、高齢者だけでなく、子ども達の教育にも大変重要なものです。2010年の「もったいないプラス」に多世代が共に支え合うような家族の支援を考える、ということで問題提起をしております。多世代が支え合うために、どういう施策がいいかということも、具体的に、直接補助金よりも、どちらかというポジティブアクション、若い人達に高齢者と住まいすること、あるいは、味噌汁が冷めない距離に住むことの重要性などポジティブアクションとして県としても発信していきたいと思っております。

高校再編に併せ、家庭科教育の充実を求めることについて(教育長)

大津市で起こった虐待死といじめ自殺、いずれも尊い人命の失われた大事件。県の重点施策に、子育て・子育て応援を謳い、住み心地日本一を目指していただいただけに動揺は隠せません。いくつかのSOSや情報がありながら、最悪の事態を防げず、今なお落ち着く様子もない。その原因を究明すること、再発を防ぐ上からも非常に重要であると思えます。

自殺そのものについては、年間3万人を超える人が自らの命を絶っていること数年の状況。東日本大震災の犠牲者が、約2万人ということを見ると、累々と横たわる遺体を想像するに、とてつもなく大きな問題であります。

将来への不安、病気、いじめ、事業の失敗、いろいろなことが要因になっているとはいえ、自分が一人で生きているとの思い込みから抜け出せない結末として、非常に悲しいことです。

病気そのものへの治療や投薬は同じでも、心のあり方は人それぞれに違って当然、心を病む人への心のケアに積極的にかかわっていけるような日常生活の中に、家庭の果たす大きな役割があるように考えます。

しかし、家庭の状態も大きく様変わりして、核家族や一人世帯が増え、いもこじに比喻されるような、複数の人の考え方に揉まれて自分の考えを構築していく人間形成が、できにくい状況になっているのも現実です。

こうしたことは戦後の家庭の在り方が変わって、自由な暮らしの裏側で起こった負の面であり、50年60年かけて変化したものを元に戻すには、それよりも長い時間を労しなければならないでしょう。

私は、ここで教育による家庭の在り方に望みを託したいと思

ます。

以前にあった家庭科教育が、今日ないがしろにされ、その存在価値が人々に評価されていません。

しっかりした家庭科教育が実施されていたならば、風紀の乱れも自重されるであろうし、家族、家庭の在り方や、子育て、介護等、衣食住に至る家庭経営を、成人するまでの教育の中で、しっかりと教えていただきたいと思います。

常識を逸脱した無知な母親が、あまりにも多すぎます。核家族による自分たちの都合のいい考えばかりの中で、結論付けられていくご都合主義が、判断を狂わせていると思うのです。

いかに重点施策に子育ても看取りの問題も謳ってはみても、家族が協力し合って育てる、お世話する現実が整わないと、なすすべはないのではないのでしょうか。自己主張を曲げない、自分に合った生き方を求めるあまり、行きついた人生を社会の責任と転嫁するのは、人の道として間違っている・・・と思います。

いろいろの事情はあるにせよ、そうならないために家庭に関する諸々を身に付けていく教育、特に、高校再編の今、お考えいただきたいと思うのです。旧い考え方と一蹴されそうですが、これだけ思いも及ばぬ事件が起きる今日、それぞれの生き方という前にしっかりした家庭科教育が実施されて、人生を選択すべきと考えます。

再編の中で、歴史ある彦根西高校の家庭科が、代わるべきところなく総合学科に飲み込まれて姿を消されようとしています。残るのは、大津高校の1校のみとなります。

今日まで行われてきた家庭科教育は、それだけ時代に合わないのでしょうか、徹底した家庭科教育で立派な子女を育成することは、今日起こっている未熟な家族、母子関係の中で後を絶たないいじめ、虐待等の歯止め大きく貢献できると考えるものですが、現代における家庭科教育についての見解と、県内偏らずに高校家庭科教育の復活についての所見を求めるものです。

答 高等学校の家庭科教育では、衣食住や子育て、高齢者支援など家庭を築くことの重要性を学んでおります。さらに、職業学科の家庭科教育では、食物産業やファッション文化などに結びつく専門的な教育を行い、生活文化に係る職業人を育成しております。

加えて、保育や介護などのヒューマンサービスなど人にかかわる人材を育成し、社会全体で家庭を支えていくものであると考えております。いうまでもなく、人間が生きていく基盤は家庭でありますことから、これを支える家庭科教育は大変重要であると認識しております。

彦根西高校は、高等女学校の流れを汲む伝統校であり、家庭学科では、「デザイン情報」および「食物調理」の2つの類型を置いて、家庭科教育の専門的な学習をしております。

今回の再編におきましては、彦根西高校の伝統ある家庭科教育の流れを引き継ぎ、専門性をさらに高めるとともに、高等教育機関への接続も視野に入れながら、家庭科教育の充実を図ってまいりたいと考えております。



西村久子事務所

彦根市甲崎町19-1 (稲枝北駐在所より西へ約100m 南側道路沿い)
定例政調会 第1金曜日 午後7時~10時

ご意見を お聞かせください。 Tel 0749-43-2020 Fax 0749-43-4700

西村久子ホームページ (ブログ)

西村久子 活動日記

http://nishimura-hisako.net/

